

松平伯爵家藏法華經見返に就いて

白 畑 よ し

この法華經八卷は昨年六月國寶新指定の候補として、初めて帝室博物館に展示されたことは周知の如くである。かやうな美々しい莊嚴經は、平安、鎌倉期に於ける法華經書寫の盛行に伴ひ、幾多世に在つたであらうが、今にして終始完全に殘るものは至つて稀なので、當經の出現は寔に貴重なことと思はれる。殊にその見返繪は楚楚として優しく、愛惜すべき美しさが漂ふ。此度は等の見返しを圖版に掲げるに當つて、簡略に知る處を附して紹介の記としたい。

經卷の體裁に就いて記せば、表紙及見返は金銀の細かい箔を散らした紫紙を用ひ、表紙には外題を記す外繪様及び文様等はなく、見返には綠青、群青、朱等の華麗な色彩を主色とし、山岳、佛、菩薩人物等は大概下地に胡粉を塗り、墨線にて劃する。樹木の幹、枝等は濃墨、葉や花には綠青、胡粉、紅等を點する。その間霞、土坡、水波等には多く銀泥を用ひてゐる。

經文の料紙は黄味を帯びた稍粗い鳥の子様の紙で、堺上下には土

松平伯爵家藏法華經見返に就いて

坡、草木、蝶、鳥、欄内には同じく蝶、鳥、折枝、葉等の文様を共に銀泥を以て散らしてゐる。軸は水晶で乳白・綠等の曇りあるを交へてゐる。そして是等八卷にはすべて「一校了」の奥書があり、第一卷にはその右下に「あんのかく」と又第六、八卷には「あん女かく」と書き添へてゐる。

當經の最も注目される處は、紫紙に五彩、銀泥等を糊塗して廣々とした自然の風景の中に佛、菩薩及び唐風の人物等を配することである。申すまでもなく紺紙に金銀泥を用ひて佛、菩薩等を並列するを描く例は最も經繪には多いが、その性質上概ね線描きの範圍に止まり自ら無味な趣に傾くことを免れないと思はれる。又反對に例へば平家納經の嚴王本品や分別功德品のやうに或る法華經和歌に原く見返繪で一見すれば宛ら時勢粧を描いたやうなものも存するが、當松平家本はそのいづれにも片寄らず、和やかな美しさの中に法華信仰の切々たる心が發露されてゐるかに看取されるのである。

古來法華經二十八品を八卷に書寫する一卷經の完本は、多くの例

を文献の上を示し、又遺品に就いては經文のみのは見受られるが見返の圖様の殘存する例は尠く、淺草寺に藏有されるのが僅かにその好例と稱されるものであらう。それ故今新たに松平家本を加へ得て、彼是對照を試み更にこれを中尊寺經等の若干の莊嚴經の例に比較して見ると、法華經の見返繪の題材に就いて一つの意味が存するやうに窺へる。

法華經の見返しに經意を描くのは、最も信仰的に自然なことであり、恐らく大部分の莊嚴經がそれであつたと想像されるが、現在殘る一品經には終始二十八品にすべて經意を具體的に描くものは見られない。よつて當松平家本は既に失はれた二十八品の經意の見返しを考察する上に最もよい基本となることと推察される。それに關しては先づこの見返繪の題材を明らかに知ることが必要であらう。唯僅かな個所に剝落がある爲全部に互つて圖様を判然と辨別出來ない點もあるが、以上第一卷から順にその繪解きを試みることにする。

第一卷（序品、方便品）を含む繪様は、上方はるかに峩々たる靈鷲山を表はし、その下方には起伏のなだらかな山容を描き、山巔には點々と樹木が生え、鹿や狐の遊歩するの見える。この山を背景として畫面の中央に如來が光明を輝かして趺坐する。尙その少し下方にあたり異形の人物が多く見え、中には鬼に引かれる亡者の姿も交へるので、これは恐らく地獄を意味するものと思はれる。さうとするとこの如來の光明を映發することは、即ち正に法華經を説くに

際して現はれた放光瑞であることが諒解される。知られる通り經文に「萬八千世界、靡不固偏下至阿鼻地獄、上至阿迦尼託天」とあるが、畫面の上方には靈鷲山の左方小さく二棟の屋根があり、下方の地獄に對し、阿迦尼託天をも示してゐる。尙この卷には方便品の經文の意味も描かれてゐるかと思像されるが、剝落して定かに見難い。しかし圖の右下方岩屋に通ずる階段の道があり、その傍に石幢とそれを拜する人が仄かに辿られるのが、或は同品の偈に石幢を起る者の佛道に成ずるといふのに當るのではなからうか。

第二卷（譬喻品、信解品）は最も當經の有名な譬喻譚である「三界火宅」「長者窮子」を描いてゐるのは興味深い。三界火宅は唯牛、羊、鹿の三事のみを現はし、長者窮子は長者、召使、地に悶絶する長者の子を描く至つて素樸な趣致のものである。尙この第二卷も靈鷲山を背景に佛、菩薩を示すことは前卷と同軌であるが、聲聞形の佛に相對するのは或は譬喻信解二品に於いて釋迦に問曰する舍利弗、迦葉を意味するものであらうか。しかしこの佛、菩薩、聲聞等が目立たず小さく描かれてゐるのは自らこの譬喻譚を主として畫面に現はさうとした意圖が看取される。

第三卷（藥草喻品、授記品、化城諭品）は圖の中央稍右寄りに聳立つ山、又更にその右下方にも山容を描いて、佛菩薩及びそれに對し瞻仰合掌する聲聞形を配する。これは授記品に迦葉以下の聲聞が未來世に成佛の授記を得るところであらう。尙この畫面は二群の山容の外は中央に河川、その左方には濕地らしい影をのぞかせ、岸邊

には種々の草が生え、陸には田地らしい墨線が認められる。そしてその間牛や人影と思しき形が幽かに迎られるが、恐らく耕作の圖が描かれてゐたと推される。即ち當品の大雨の衆を悦豫させ、卉木藥草、大小の諸樹百穀苗稼等を豊足するといふ意に由るとものであらう。以上藥草喻品と授記品の經意がそれぞれ含まれてゐることが知られたが、もう一つの化城諭品に關しては判然と當てられない。

第四卷（弟子品、人記品、法師品、見寶塔品）の見返には先づ上方中央に燦然と涌出する寶塔を現し、天人、聲聞等の鑽仰するを主景とするもので、當八卷中最も華麗な趣致になる。即ち經文中の「爾時佛前、有七寶塔、高五百由旬、從廣二百五十由旬、從地涌出、住在空中」以下のそれに當る。次にその下方六人の僧形の人の寶塔に向つて禮拜するのは五百弟子品及人記品に於て受記を得る富樓那、阿難、羅睺羅、憍陳如及學無學二千人を意味させてゐるのであらう。此の處は他の見返しの例に従へば、當然佛菩薩の姿を現すべきであらうが、唯寶塔のみを以てそれを象徴させ、畫面の中心を美しい寶塔に集中して畫圖してゐることは、筆者の周到な用意が感知されるものである。

その他當卷の畫面には右の六聲聞の前方にあたり、地を掘る人を描き、右方の山のかなたに佛の半身が現れそれより發する光明が下方の深山の中に靜止する人にさしてゐるのは共に法師品による。前者は「譬如有人、渴乏須水、於彼高原、穿鑿求之」を意味するものであり、後者は偈文中の「若說法之人、讀誦此經典、我爾時爲現清

松平伯爵家藏法華經見返に就いて

淨光明身」に當る。

第五卷（提婆達多品、勸持品、安樂行品、從地涌出品）この見返しは先づ一見して提婆達多品の國王が阿私仙に奉仕するところと、龍女の成佛するを表はすことが知られる。即ち畫面上方山の中腹に薪を背ふて來る人と丸い器を肩にして水を汲み、今し橋を渡つて瘦骨の阿私仙の坐す窟に向ふのは、この國王のことと肯かれる。經文の「王聞仙言、歡喜踊躍、即隨仙人、供給所須、採果汲水、捨薪設食」の意を二段に分けて、恰も物語繪のやうに示してゐることは、かやうな見返しの繪として特に人間的な溫かさとしみを感じさせるものがある。

次いで龍女の成佛を示す場面は、右下方に佛菩薩を描き、その前方にそれに對して水中から現する數人の、女人の中央に寶珠を捧げてゐるかに見えるのがそれと知られる。提婆達多品に於てこの龍女を描くことは、既に平家納經にも見られるが、同圖は龍宮の豪華な城を大きく配し、龍女は長袖の領布を翻轉させて、宛ら舞姬のやうに佛に對する絢爛なる圖様である。それに比して當松平家藏の提婆達多品は同じ經意を描き乍らつゝましく素樸な中にその要を表はさうとしてゐるかゞ諒解出來る。彼是對比して各々その發願者の背景が偲ばれるやうである。

尙畫面には以上の外に左方に翳をかざす六人の侍女を從へる貴人らしい姿が見える。圖様が稍々剝落して判然としないが、この六人の翳を持つ意味に就いては和漢三才圖繪に「天子行具女孺六人、立

於左右後持翳插蔽、以令人漫不拜顏也」とあるのに察し、即ち王者を示すと考へられる。それ故矢張りこれ提婆達多品の國王の求法の事柄に係るものであらう。結局この第五卷の見返しは提婆達多品に關する經意のみに終始して他品の意を現はしてゐないことは、殊更に同品の意を強調してゐることが窺へるのである。同品は更めて記すまでもなく惡人達多と罪障の龍女との成佛を説き、法華弘經の功德の深重を證するものであるが、當經卷がひたすらそれを示してゐる處に、當代に於ける法華信仰の一面の意義がかゝつてゐたのではないかと注目される。

第六卷（如來壽量品、分別功德品、隨喜功德品、法師功德品）は上方に靈鷲山を背景にして菩薩、聲聞に圍繞される佛と、それに向つて禮拜する俗形とがある。尙その左下方には峨々たる山が聳え立つ。又右の下方には橋を渡つて山洞に通ずる階段があり、その間二三の人物を配する。かやうに當卷はさして特種な事象を現はしてゐないので、一見して意味の解り難い畫面ではあるが、佛の靈鷲山に現ずるのは、當卷中最も眼目である如來壽量品の「常在靈鷲山」に原くと知られる。又當卷が他の卷に比して畫面が殊に高峰の連る態を主景としてゐることは法師功德品に、若し大衆の中に於て法華經を説く者あれば、その功德により悉くの世界を見得るといふことがあるが、その世界は即ち「父母所生眼、悉見三千世界、内外彌樓山須彌及鐵圍并餘山林、大海江河水」とあるので、是等の連峯は彌樓山以下の諸山に當るのではないかと考へられる。

第七卷（不輕品、如來神力品、囑累品、藥王菩薩本事品、妙音菩薩品）の見返しには右方中央に佛、菩薩が見え尙その前方に一菩薩が佛に相對して何物かを捧げてゐるが、これは淨光莊嚴國より飛來せる、妙音菩薩と肯かれる。即ち經文の「而來詣此、娑婆世界耆闍崛山、到已、下七寶臺 以價直百千瓔珞」と知られる。そして畫面の上方に小さく一つの國土を描いて虚空をはるかに距ててこの菩薩の在す淨光莊嚴國を意味してゐる。

尙その下方の場面は長者と覺しき宏大な家を描き、門前に召使風の人に衣服を受ける裸者が見える。その後方には鞭を手にして家の傍に腰を降ろしてゐる人、又前方の柳樹のあたりには矢張り鞭を振上げつゝ何かを追ふ態の人を現はしてゐる。裸者の受衣に就いては藥王菩薩本品に此經のよく一切衆生を饒益してその願を充滿せしめ、それは恰も「此裸者得衣」の如くであるといふ意に由ると看取されよう。又鞭を持つて人を追ふのは、有名な不輕菩薩の打擲の難を示すに外ならない。畫面には不輕菩薩を現はして居ないが、これに危害を加へる衆人の姿のみを描いてその意を汲取らせたのであらう。而してこの第七卷の見返しの畫面で注目されるのは、堂々たる邸宅を描いてゐることである。例へば第二卷の譬喩品及び信解品の如きは當然長者の家のある場面を豫想するが却つてそれを省略し唯それを三事と人物のみで示してゐるのは、構圖の複雑するを避け、譬喩譚の印象的な効果を齎らさうとしたのであらうか。そしてこの第七卷には必らずしもかやうな大廈を配せずとも差支へない場

面と思はれるのに、反對に描き添へてゐることは、當經八卷の見返しの上に圖様の單一に流れるのを避け、如何に變化の妙を醸し出さうとしてゐるかが窺はれるであらう。

第八卷（普門品、陀羅尼品、嚴王本事品、普賢菩薩勸發品）は中央上方に山があり、山巔には刀を振り擧げつゝ人を追ふ男子、それに追ひ詰められて遂に斷崖から落ちる人と、今しその危きに當面する人とを描く。これは既に考へる餘地もない程、普門品に於ける「或在須彌峯、爲人所推墮、念被觀音力、如日虛空住」を意味すると知られる。尙この山岳の右方の下には草葺きの庵中に人影は剝落して定かに見難いが、經机の上に經卷の並ぶのを見るのは、言謂山中法華護持者であらう。果してその斜の山蔭に白象の頭部が見える。尙その上方を辿ると大方は消え失せてゐるが、臚に普賢菩薩の姿が認められる。即ち普賢勸發の相を示すものであることは明である。普賢勸發の圖は法華經の眼目となる如く、久能寺經をはじめ、爾餘の莊嚴經の遺品に殆んど描かれてゐるが、當圖は就中最も素樸味が横溢してゐる。

尙當卷の見返しには二人の小兒が、一は頭上から他は足下に火焰らしきを發して歩む不思議な姿を描いてゐるが、これは即ち妙王嚴王品に於ける淨藏、淨眼の、二王子の神變を現するを示すものである。經文の「於虛空中、行往坐臥、身上出水、身下出火、或現大身滿虛空中、而復現少、小復現大」に當るのであるが、畫面には二王子と共に左方の空白に何か異形のもものが各々大小二つ飛翔するのは

矢張りこの神變を表示するものと見受られる。

以上に就いて知られるやうに當松平伯爵家藏法華經八卷の見返繪は大體各品に於ける主眼の經意を現はしてゐることが認められるに至つた。

而して次にこれに對比される見返繪を附す淺草寺經は法華經八卷に開經無量義經及結經觀普賢經を具へる十卷完好のものであるが、曾てその全貌を世に紹介されたことがなかつたので、今この松平家本に關聯して些か知るところを記し加へることとする。

料紙は經文、見返共同質の紙であるが、經文は黃色、見返は褐色味を帯び、共に全面に金もみの小箔を撒く。そして見返繪は極めて繊細な金泥の描線を以て佛菩薩、樹木、山岳等を描き、その間震、土坡、岩石等には銀泥を塗つてゐる。製作期に就いては從來平安末鎌初の頃と稱されてゐるが、大體描線に固さが認められるので、鎌倉初期から中頃にかけての遺品と見るのが妥當のやうである。この各卷の題材の意味は明らかに經意を表はすと認められる態のものであるが、尙仔細に見て行くと、それが殆ど松平家本の經繪の中に含まれてゐるものと同軌であることが知り得られる。即ち第一卷に於ては序品の釋迦の説法を示して靈鷲山を背景に釋迦及びそれを圍む衆生の姿が見られる。第二卷は中央に牛、羊、鹿の三事が點在し、右方には火を發する長者の邸宅を描く、即ち譬喩品の三界火宅を意味してゐる。尙第三卷は大地を耕す農夫を中心として、種々の草木

を點じ、空には大雨を象徴する龍の姿を描き、それを渴仰する農夫の姿も配する興味深い繪様であるが、これは松平家本と同じ意味を持つものと看取される。即ち同本の圖様の剝落して明かに窺へない所を辨じてゐるので殊に注目される。次に第四卷は寶塔の涌出を表

岩崎家本法華經冊子の内(法華變相圖)

らかに不輕菩薩の迫害を受ける所を示し、第八卷は須彌山上から落ちて虚空に住する人を表はして觀世音菩薩普門品の經意を示してゐる。

次に無量義經及び觀普賢經も矢張りその經意を示すもので、無量義經は中央に河川を表はし、船人の客を乗せて對岸に船を渡すのどかな一風景であるが、經文に引けば「船師大船師運載群生、渡生死河置涅槃岸」といふ極めて深重な意を含むことが知られる。又觀普賢經のそれは行者に影向する普賢菩薩を描く。同經の見返繪として然るべき意味を持つことは更めて記すまでもない。

かやうに淺草寺の法華經の見返は第四卷を除いて外はすべて、各卷の初にあたる各品の經意を描くことが知り得るが、これが松平家本のやうに一見返の中に各品の經意、即ち二つ以上の意味を表はすことはなく、すべて一畫面一つの經意のみを表はしてゐる。即ち松平家本に比して單純化されてゐることに氣付かれる。しかし各卷の經意が松平家本のそれとものものと比較して唯第六卷の經意が異なるのみで、他は全く同じ經意を示してゐることは留意すべき一項であらう。つまり松平家本と淺草寺本とのかやうな一致こそは、既に法華經の見返に於てその經意を描くには或る定型があつたのではないかと想像されるのである。

はし、又第五卷は窟中の阿私仙と水を汲む王子で提婆達多品のそれを描く。次に第六卷は說法する僧形の人に聽聞する衆人を中心として、その上方に天人の舞ふ場面は、如來壽量品の經文の一節にて「我此土安穩、天人常充滿」に相當すると考へられる。第七卷は明

古來法華經の意を畫圖することは知られるやうに法華變相圖又は法華曼陀羅(註一)があり、燉煌の壁畫をはじめ大陸にはその遺品も乏しくない。又古文献(註二)にも尙多數是等に關する記事が見受られる。我國に

於ても平安朝以來それに類する文献があるのは既に周知の通りである。従つて經卷に於ける法華經繪も當時の法華經信仰の盛な風潮に鑑みて、恐らく是等の文献に知る法華曼荼羅との關聯、或は影響が推察されよう。

即ちそれを裏づける好個の例として岩崎男爵家藏有の法華經冊子(註三)に附隨する變相圖がある。當冊子には願文が具り、それによつて發願者及び寫經の筆者等が判明し、製作の時は凡そ北宋末から南宋初期にかけて行はれたことが知られるものである。その中の一葉に序品及び方便品を中央を堺にして各々上から下に順に經文中の主要な文句を書き示し、その側に相當する場面を圖してゐる。序品に就いては先づ如來の放光瑞を意味する「阿迦尼吒天」よりはじまる八場面を隙間なくぎつしりと描いてゐる。このやうに一品の主要な意を幾場面かにわたつて現す趣向に就いては松平本の提婆達多品が想起されるであらう。そして岩崎家の變相圖の提婆達多品を圖示してゐるところが矢張りこの阿私仙の求法と龍女の成佛で、彼是相一致するのも興味深い對照である。

我國の佛教藝術が凡そその典據を大陸に求めてゐることは別に深く考へるまでもないが、莊嚴經に就ても松平家本の出現によつて今その實例を對比し得られるのは幸である。かくて當經は大陸の法華變相圖の例に源を發するかに想像されるが、それが例へば經卷の見返しとして一品の中の意を一つ選ぶとすると果してどれを主要と見るのであるかが問題となるであらう。言ひ代へれば平安朝から鎌倉

にかけて最も多く圖繪された莊嚴經の各品にはどのやうな經意が描かれるのであるかに關するのである。漠然と想像を巡らせば、畫圖する人の任意によつて畫材として最も興味が多い所を採擇しさうにも考へられる。それ故或る一品に就いても、それ／＼の莊嚴經が各々異なる經意を描くことが生じて來るのではないかと一應は常識的に推察される。しかし當經の見返を中心として淺草寺本が既記の如くであり、又其他に二三の莊嚴經を對比して見ると、それ等は全體變化がなく、或る一つの範圍を出ないと言つても差支へない程である。

それを裏づける資料として中尊寺經の内大般若經の一部の見返繪(註四)が存する。これにはその經意を描かず、法華經の經意に因むものを附してゐる。かやうな現象は既に先行してゐた法華經の見返繪をそのまゝ當籤めたことを物語るであらう。即ち經繪、殊にこの種金銀泥の見返繪が、恐らくその性質に照らして、世の常の畫師の筆なるものでなく、恐らく寺院に附屬する緇徒の手になつたものと考へられる。従つて寫經に就いての見返繪の軌範の如きものが多く具はつてゐたと解される。中尊寺經の書寫に際してその經卷とは無關係の見返を附したこともその種本をそのまゝ利用したことを如實に示してゐると想像される。

今この中尊寺經に於ける法華經の繪を松平家本に對照して見ると各品の經意の場面が殆んど大部分相一致してゐることが知られる。唯松平家本は一見返繪の中に幾品かの意を含めてゐるが、中尊寺經

序品	方便品	譬喻品	信解品	藥草品	授記品	化城品	五百弟子授記品	授學無學人記品	法師品	見寶塔品	提婆達多品	勸持品	安樂行品	從地涌出品	如來壽量品	分別功德品	隨喜功德品	法師功德品	常不輕菩薩品	如來神力品	囑累品	藥王菩薩本事品	妙音菩薩品	觀世音菩薩品	普門品	陀羅尼品	妙莊嚴王品	普賢菩薩勸發品
第一卷	第二卷	第三卷	第四卷	第五卷	第六卷	第七卷	第八卷																					
如來放光瑞 (石廟供養カ)	三界火宅 長者窟子 大雨豐足諸種草木苗穀 聲聞授記		高麗穿鑿 山林唱聲 寶塔涌出 阿私仙ト國王 龍女成佛	常在靈鷲山	不輕ノ難	裸者得衣 妙音釋迦ニ瓔珞ヲ奉ズ 須彌峯推墮	二王子ノ神變ヲ現ズ 山中受持法華經者																					
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
同上(第三三五)			高麗穿鑿(第一六八) 十種供養(第二九一) 摩頂(第五二三) 同上(第一二七)	阿私仙ト國王 龍女成佛(第二九、一六七、七四、六四一) 蚊蟻ノ戒ヲトキ善神ノ加護ヲ受ク(第二七四、一三九)	舍利供養良醫治子(第五二八) 此土安穩天人充滿(第一九三)	諸ノ妙ナル珍寶宮殿等ヲ與フ(第四八二) 同上(第九九、一二二、五二五)	摩頂附屬(第一五九) 妙音釋迦ニ瓔珞ヲ奉ズ(第一八)	二王子ノ神變ヲ現ズ(第五七八) 山中受持法華經者(第二四六、五九七) 生怛利天(第一一六)																				
同	同	同	貧人醉酒 十種供養	龍女成佛	良醫治子																							

は大方一品の意が一つの經意を現はして、一見返繪が一畫面となつてゐる。その中若干に就いては松平家本の提婆達多品の如く一見返の中に同一品の二つの意を表はすものがあるが、しかし他品の意を併せて描いてゐる例はないやうである。よつて茲に試みに以上の關係を明らかに知る爲、當松平家本・淺草寺本及び中尊寺經に平家納經の經意を描いたものを參考に加へて並列圖示すると上の如くである。尙是等のものより時代の溯る文献で、その片鱗を窺ふ例として榮華物語の「本の雫」の著名な記事がある。即ち治安元年の女房一品經に於ては從地涌出品は恒沙の菩薩の涌出、壽量品は常在靈鷲山、提婆達多品は龍女の成佛を示したものであることが知り得られる。

右の如く大體法華經二十八品の見返は、題材的な意味に於て範圍

が限られてゐることが推されるが、これに就いてはその原く典據が矢張り世にあつたと想像されるが、例へば空海(註六)の「法華經二十八品大意」のやうなものが想起される。その各品の意が以上の見返繪の

松平家本 法華經序 品與書

それと大略符合することは、少くとも何等かの關聯があつたのではないかを思はせる。

かうして我國に於ける莊嚴經の見返繪が互ひに密接な繋りがある

松平伯爵家藏法華經見返に就いて

ことを知り得たが、翻つてこれを各々の様式の上には如何なる關聯が見られるであらうか。先づ全般的に是等の莊嚴經を通觀すれば、それ〴〵異つた畫趣を持つものであることは記すまでもないが、簡單に言へば平家納經は柔和華麗で所謂大和繪風の趣が最も濃く、中尊寺經はそれが紺紙金泥であることにもよるであらうが、その布置や構圖は佛畫的であり、殊に速筆を驅した線描は如何にも縉徒のすさびとして、圖像の筆線に相通ふを思はせる。而して當松平家本はその中間的な趣致を具へるとも稱すべきであらう。自然描寫や色調の優美なところは矢張り大和繪風の和やかさを追ふが、山や岩の皴の繊細な墨線を重ねる手法、又例へば第二卷及び第七卷の前景の樹木のやうに應々墨のみにて強く尖銳な線を引くことは繪卷の描寫にも例のない特異な趣が看取される。しかしこの特異な線描が平家納經及び中尊寺經に就いて仔細に檢すると矢張り一脈相通する點が見出される。即ちこの山皴は平家納經の法師功德品の中に、樹木は同じく五百弟子品に於てそれを見ることが出来る。又中尊寺經では金光明經第三の見返に最も著しく同じ趣の樹木が見られる。これによつて是等の莊嚴經は又様式的にも一筋に合流するものであることが肯かれる。そしてこの様式の近似こそは當經の製作期の平家納經及び中尊寺經に近接することを示唆してゐる。知られる通り平家納經中尊寺經は共に既に平安朝末期に當る年代の書寫にかかることが判然としてゐるが、當松平家本も又略同じ頃の年代を想定して大過ないであらう。唯山皴や樹木の描法と共に、全體的にも稍前二經に比

して寫實味が加はり、少しく動的な趣が仄見えることと共に素樸味のある表現に、又他方經文の手筆に就いても奥書の「まんな女」の如何なる人か知る術もないが、筆致に稍のどけさが乏しくなつて來てゐることも、或は一步降つて、鎌倉初葉の遺品ではないかを幻影せしめる。しかしかく判然と限定して時代を定めることは尙躊躇されるものがあり、強ちに鎌倉期と主張する根據は認められないので、明瞭を缺く嫌ひはあるが、先づ平安末鎌倉初に置くことが最も妥當なわけではなからうか。

以上に於て大體松平伯爵家藏法華經八卷の見返に關して、簡略な説明を試み、併せて法華經意の繪畫の典據として貴重な資料となることを些さか明らかにし、最後にその製作期に就き粗雑な私考を加へたのであるが、この女人の敬虔な祈りが籠められた温かく可憐な經卷が我國法華經藝術の上に光彩を添へたことは、寔に慶ばしい次第である。

註一—三 國華第四百三十七、八、四百三十三號所載松本榮一氏の「法華經藝術」に詳細な御研究が發表されてゐる。

註四 石田茂作氏の中尊寺大鏡解說に據る。

註五 圓仁の承和五年入唐求法目錄等に兩界曼荼羅と共に之を本邦に請來せしことを記し、圓珍は又法華曼荼羅諸品配釋一卷を製せり、後その造立が盛に行はれ、文永七、八年宸筆御八講記に天曆年中法華曼荼羅一鋪を續せしことを記し、本朝文粹第十四に寛和元年五月藤原爲光が女御四十九日追薦の爲に法華曼荼羅一鋪を圖繪したるを記し、大雲寺緣起に京都岩倉大雲寺如法院多寶塔内陣に法華曼荼羅木像四十六尊を安置せしことを傳へ、本朝續文粹第十二に、承曆三年十一月京都法成寺釋迦堂

の柱並に法華三昧堂の壁に之に彩畫せしことを記し、中右記には嘉承二年九月京都香隆寺に於て法華曼荼羅を供養せしこと記せり。(望月信亨氏編、佛教大辭典に據る)

註六 法華二十八品大意(大日本佛教全書二十四) 夫六句通序。舉證信而首稱。五種別叙。表發起而次居是以。等覺慈氏。問三念一疑於覺母。龍種文殊。答四酬三問於逸多。然則無問法雷。驚開驚子之蟄戶。簡許嚴風。吹去上慢之萎華。諸佛智以爲標章。實相十如以爲肝心。開權顯實以爲咽喉。開近顯遠爲唇舌。所以大專因緣。盡出世大意於諸機。己今當說。極難信難解於一代。爪像沙塔。高登如來因。小音一稱。遠攀妙覺果。五佛之四一。琴瑟於契經之筵。六義之三。一。錦繡於應誦之機。門外三車。開方便於先三。露地一牛。顯眞實於後一。聆躡獅子。緣備質。近宅。憂慮長者。集君臣而付財。三草二木。同歸一地。四大聲聞。俱趣一果。眠化於中路。去集來寶處。繫寶珠友宅。令恣資財。多聞慶喜。聞記剎而憶往。忍辱羅雲。受深決而覺來。五種法師。分同類於悲村。三箇儀軌。集聽衆於幽岫。多寶妙塔。踊上空而證實。釋尊世雄。變下地而坐客。惡性調達。臥阿鼻而聞記。聰明龍女。奉圓殊而成佛。得記除障男。發願弘此經於他國。未記除障女。改願求受記於將來。四安樂行。龜鏡於初業。一佛乘名。難開十方。摧魔賊而得明珠。見法夢而冠即是。淨行菩薩。裂大地於萬方。能昇如來。顯本地於三世。八生一生。登眞究竟於即座。五品六根。導觀行相似於後代。三佛性之像。鑒於不輕鏡。十神力之影。浮舊住池三摩三唱付。動如來三業。三敬三答ノ禮。振菩薩十善。分身既還於本土。寶塔亦閉於玉扉。喜見燒身。十喻讚經。妙音入國。萬鉢樂目。觀音遊普門。七難永霧。卷藥王說物持。三灾亦霜如消。邪見嚴主。緣二子而入道。乘象普賢。期三七而出前。警中明珠。掌中妙藥。蓋謂斯矣。

藏氏 同

(卷五第) 同

藏氏壽頼平松 爵伯 京東

(卷三第)繪返見經華法

藏氏 同

(卷八第) 同

藏氏壽頼平松 爵伯 京東

(卷七第) 繪返見經華法

法華經見返繪

東京淺草寺藏